

1 はじめに

昨年度、高知大学大学院の教育学専攻特別支援コースで、ユニバーサルデザイン（以下UD）について学び、自らの教科指導の在り方を見直す機会を得ることができた。昨年度自分自身は実際に授業を行わず、所属校の協力を得てUDによる総合学習の授業づくりを試みたので、今年度現場に復帰するにあたって、可能な限りUDの要素を取り入れた専門教科である国語の授業を実施してみようと考えた。

2 平成29年度の実践内容

UDの5つのポイントに基づいた工夫を授業に取り入れ、授業後にUDポイントに基づくアンケートを実施してその効果を図った。また個別の単元にあった自己評価を作成し、単元の終了時にUDのアンケートと同時に自己評価アンケートを行った（別添資料3）。UDアンケートは事前評価のため5・7・9・12月の計4回実施した。対象生徒は5月がクラス単位、7月と9月が習熟度別で同一、12月は前期終了後新しく習熟度別に編成されたクラスである。研究授業は国語総合のうち古典領域で行った。

以下各ポイントの概要を述べ、UDに基づいた授業づくりチェックリスト（教師版）（別添資料2）から各ポイント別の項目を引用し、実際の授業で実施した工夫を示す。

(1) I 環境の工夫

ア 1時間の授業の流れを視覚的に提示する以外は、教室の前面に一切掲示をしないようにした。毎時「本時の目標」を提示したが、掲示が雑然とならないように、授業の流れと目標が同一になるような提示を心がけた。

イ 学習姿勢や学習規律を具体的に指示した。座席の位置は授業者が確認し、授業の始めや途中で学習に必要なものが出されているか確認した。座席はホーム毎の出席番号順であるが、ペアワークの円滑な実施のために欠席者の席を補充するなど配慮した。

(2) II 情報伝達の工夫

ア 具体的で明確な指示や説明を心がけた。全板書をスライドで投影する上で、生徒の様子を見ながら進めるようにした。必要な部分は空欄にして考えさせるようにした。従来の質問方式に視覚支援を導入したものである。聞く、考える、書く、をそれぞれ分離して活動させるよう心掛けた。

イ 授業の流れが分かる板書にすること、板書や絵、写真、具体物等の視覚的支援を活用すること、文字の大きさや量はわかりやすさを重視してスライドの作り方を工夫した。

(3) III 活動内容の工夫

ア 授業の進め方にパターンを決め、「動」と「静」の活動を組み合わせるなど、授業にメリハリをつけるようにした。音読する、思考する、共有する、板書するなど多様な感覚を使う工夫を取り入れた。

イ 演習に段階を取り入れ、理解が早い子どもへの対応にも工夫を試みた。

ウ ペア学習やグループ学習など、生徒同士が関わり合い学び合い教え合う場を設定した。

(4) IV 教材・教具の工夫

ア ワークシートを作成し活用した。図式や参考資料の説明、一斉に取り組みたい課題・演習はワークシートを利用して行うことにした。プリントの整理が苦手な生徒もいるので、ワークシートは最小限におさまるよう配慮した。

イ 韻文や古典の世界観は想像することが難しいので、参考図書や便覧、スライドの画像（絵、写真、地図、イメージ図、図表）を利用して、可能な限り生徒がイメージしやすくなる工夫をした。

ウ 全板書をスライド化し、アニメーション機能などICTを活用し、学習内容が理解しやすくなる工夫をした。画像などの参考資料はもちろん演習などの課題もスライドにして、学習活動に集中できるよう配慮した。授業者の板書を極力減らすことで机間指導、評価、実態把握の時間が最大化するよう工夫した。

(5) V 評価の工夫

ア 具体的に評価が生徒に伝わるよう、授業中解答に○印を入れ、評価を目で見えるように生徒に示す工夫をした。週末課題などの自宅学習については、取組の良いものに対して必ず一言プラスの評価を記入し、取組の様子を次の授業でグループ共有した。

イ 板書のスライド化によって机間指導の時間を最大化し、評価や机間指導などで個別にプラスの評価や注意を行った。

3 結果と考察

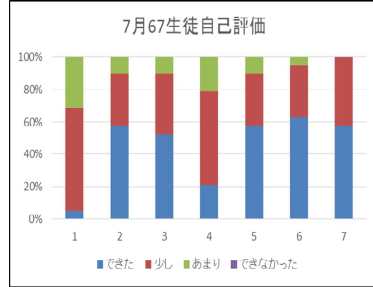
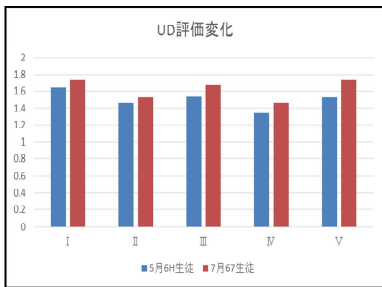
以下結果として今年度の取組みを時系列で示す。

(1) 年度初めから1回目の授業アンケートまで

所属校へは本年度新たに赴任したため、教科指導の進め方、生徒の実態把握と同時並行してUDを意識した授業改善を行った。進学校での復帰と新たな試みに不安があったが、教科内や校務分掌の分業が徹底しており、授業研究に専念できる恵まれた環境であった。研究の対象を決定する上で、当初はUDによる授業が有効な生徒を含むクラスを、と考えていたが、特性のある生徒はむしろ成績が優秀であり、ニーズとしては集団全体の底上げ、学力不振で悩む生徒層への支援の方が実際的であると考えられるようになった。定期テストの成績順に習熟度でクラス分けするので「基礎クラス」を対象とした。UDによる授業では中位、上位への波及効果があるという先行研究もある（村田・嶋崎；2015；研究成果報告：高知大学大学院）のでUDアンケートは授業に関わる全クラスに実施した。

(2) 1回目の授業アンケートの結果と考察

事前評価（5月期）と1回目授業アンケートと自己評価の結果を以下に示す。（自己評価は別添資料3①）

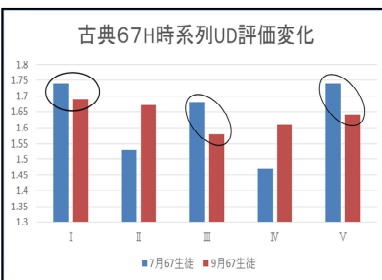


考察:UD評価は5月における6Hクラス単体の授業評価よりも全体的に上がっているが、IIとIVは中でも低く、スライドだけではなく提示の仕方や内容への工夫が課題であることがわかった。

生徒の自己評価は1の予習の評価が低かった。予習の項目は明確にしているが、口語訳の仕方について各ホームからも質問があり、取り組みやすい予習の仕方を

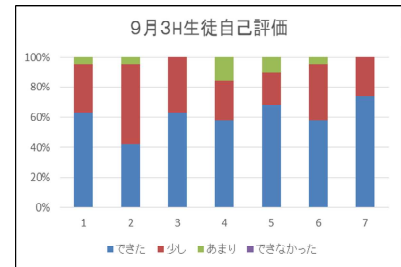
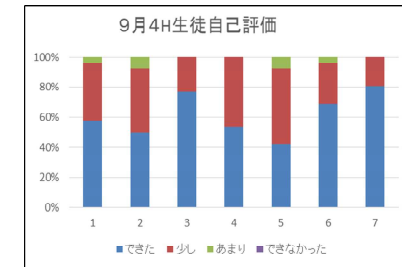
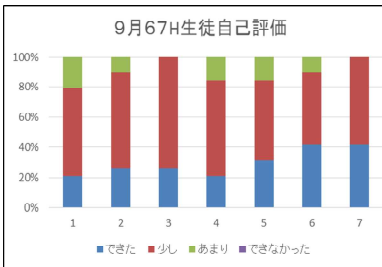
改めて指導する必要があると考えられる。4の「句形の応用への取り組み」は例文のあり方やヒントの出し方など、工夫すべき点が多くあった。

(3) 2回目の授業アンケートの結果と考察



1回目と2回目の授業アンケートと自己評価の結果を以下に示す。（自己評価は別添資料3②）**考察:**7月と9月のアンケート対象生徒は同じ。

I、III、Vにおいて授業評価が下がった。IIIについては、和歌の修辞技法について考えることが中心だったので、活動そのものへの興味関心が持てなかったことも考えられる。UDに基づく授業は当該生徒層への支援を主としていたので結果的に授業がUDになっていなかったといえる。目標設定が適切だったか根本的な練り直しが必要である。Vについては机間指導による個別へのフィードバックを毎時の授業に構造化しておく必要があると思った。

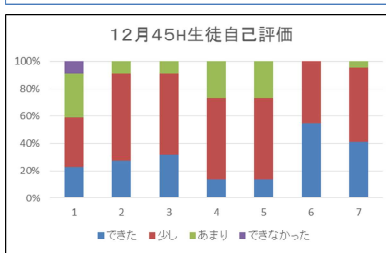
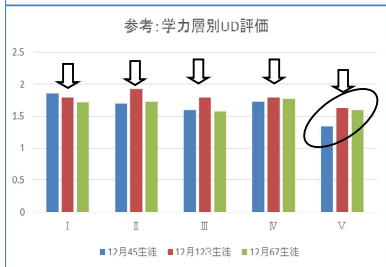
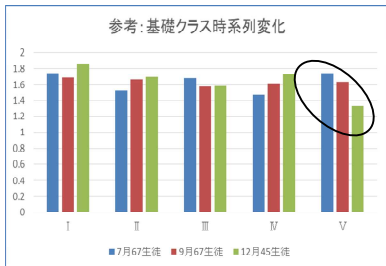


自己評価においては、4「修辞の指摘と解釈の取り組み」と5「修辞技法の効果」について「あまりできなかった」という評価が多かった。和歌の修辞技法は言葉もイメージも難しいところがあるので取り組みそのものを評価できるような質問項目の設定でもよかったと思う。抽象的な効果の記述だけでなく、選択肢を用意して理解の達成感を得られるような工夫などが課題となった。本単元は修辞技法を学年全体で一律に触れていく目的があったので修辞技法を主にして授業を構成したが、対象集団に対しては例文を増やさず教科書本文における和歌に絞って構成したほうがよかったのかもしれない。本アンケートにより、3H、4Hの応用クラスと比べ、予習の取り組みの不徹底、各活動に対する自己評価の低さが明らかになった。やはり学習に対して準備不足であることと自己肯定感の低さが理解・定着の低さと相関するのではないかと考えた。（期末テストは全体の平均が2点上がったのに対して4点上がっていた。）

(4) 3回目の授業アンケート結果と考察

1回目と2回目の授業アンケートの間が短かったことや、2回目の授業を終えてあまり改善されなかった感があったので、普段の取り組みをいかにUD化するか、深い学びにつなげるかを、前期の評価をもとに改善していくことにした。具体的にはペア活動の頻度を上げ、基本的な事柄から共有・確認をさせて受動的な授業にならないようにした。内容把握では古典教材の文脈の対応表を完成させる程度の取り組みやすい

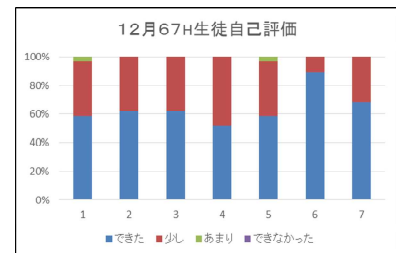
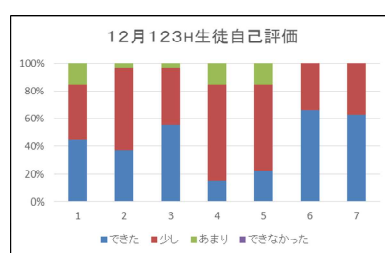
要約を課して、達成感を持たせるように心がけた。新しく担当した基礎クラスでは原文の音読と同時にあらかじめ口語訳を読むなどおおまかなあらすじを理解した上で逐語訳による解釈を行うようにした。漢文古文の文法理解の演習では、進学補習で使ったテキストからの出題に限り、同じ文章の繰り返しによる定着を試みた。理解が速い生徒は自分で復習できるように進学補習のテキストを持参させて使用した。10月以降は講座が新たになり、授業対象生徒が変わったので単純なアンケート結果比較はできないが参考までに以下に示す。



基礎クラス時系列変化：4・5Hは6・7Hの基礎クラスの評価と比べ概ね評価が高かった。UDの強化への一定の評価であると考えた。しかしVについてのみ著しく低い評価になった。個別の評価はこれまで同様に行ってきたが、この集団は「ほめられた、声掛けされた」という認識が低いということがわかった。自力でもわかる質問の投げかけ、達成感の持てる課題設定、より可視的な評価のフィードバックが必要である。これまでの学習歴からもともと自己肯定感が低く、評価が伝わりにくい集団であるのかもしれない。

学力層別UD評価：中位層（1・2・3H↓印）の評価が高く、現在の授業の在り方は中位層に対して有効であった。やはり基礎クラス（4・5H）のVへの評価の低さが目立つ。「V評価の工夫」が上がるような授業が実施できれば基礎クラスの学習姿勢や自己肯定感、学習定着を上げることができるのではないかと考えられる。（中間テストの平均点は全体と同じ下げ幅。）

学力層別自己評価比較：自己評価は学力に比例して高くなる傾向があった（6・7Hは応用クラス）。基礎（4・5H）と中位層（1・2・3H）の自己評



価はあまり差がない。自己評価4, 5の項目(文法理解)が「理解できた、定着できた」と思えるような授業が実施できれば、基礎クラス・中位層の学習姿勢や自己肯定感、学習定着を上げることができるのではないかと考えた。（自己評価表は別添資料3④）

4 成果と課題

PDCAサイクルで授業改善をし続けていくにあたって、同じ質問紙で評価を測ることは改善のよりどころとなる。授業者がそれぞれの視点で評価基準を定めると感覚の違いが生まれるので、今回使用した「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」のような客観的な指標は有効ではないかと考えている。座席配置やICT機器の利用など、物理的な理由で評価が下がる項目の是非はあるが、教科特性を超えた客観的な他者評価を普段の授業に生かしていくには普遍性が必要になる。今回の研修を通して、校種・教科を超えた評価に授業を合わせることを試みた。そこで国語科におけるペア学習の可能性から「主体的・対話的で深い学び」へのヒントを得ることができたと考えている。またアンケート結果から上位層への段階的学習課題の設定、基礎クラスへの評価の仕方など自分の授業改善のための具体的な課題を得ることもできた。スライドの導入で板書の時間を机間指導にあてたことは実態把握に大いに役立った。実態が見えたことで授業者の発問の質が変わったのではないと思う。教卓を離れ、話し合いや個人思考に注目することで、授業に集中できない生徒が減った。生徒の力を借りなければ自分の授業は成立しないとわかったことが最大の成果であり、逆に生徒の力をいかに引き出して活用するかということが最大の課題である。

5 今後の取組

今年度の試みの中で何を残し、何をやめるか模索中である。アンケートは引き続き負担の無い範囲で続行し、ペア・グループによる他者を介在した学習は発展させていきたい。国語科の板書とスライドの利用の仕方はまだまだ改善の余地を残している。英語科のスライドの在り方とも社会・理科のような資料としてのスライドの提示の仕方も違った国語科のスライドによる板書の在り方を学習し実際に試行錯誤しなければならないと考えている。生徒自身の視力などの特性と教室そのものの環境要因もあり、スライドの改善は喫緊の課題である。